

第1回石川県成長戦略「ミライカイギ」 議事録

(開催要領)

1. 開催日時：令和6年4月24日（水）14時00分～15時30分
2. 場所：石川県庁舎11階 1109会議室
3. 出席委員（五十音順）：

青木 恵	株式会社北國新聞社取締役広報室長
数馬 嘉一郎	数馬酒造株式会社代表取締役
加納 慎也	小松ウオール工業株式会社代表取締役社長
小杉 佳世子	西日本電信電話株式会社北陸支店長
新滝 祥子	株式会社ゆのくにの森取締役社長室長
新保 雄希	幼保連携型認定こども園泉の台幼稚園園長
高田 恒平	株式会社金沢彩の庭ホテル代表 株式会社金沢アドベンチャーズ代表
多田 真由美	一般社団法人春蘭の里代表理事
出島 彰宏	珠洲市総合病院内科医長兼地域医療連携室長
任田 和真	いしかわ地域おこし協力隊ネットワーク共同代表
中惣 恭子	一般財団法人小原流南加賀支部長
橋本 陽子	北陸電力株式会社石川支店営業部営業担当主査プランナー
森高 靖子	加賀建設株式会社土木部課長
安井 善成	有限会社安井ファーム代表取締役

(議事次第)

1. 開会挨拶
馳石川県知事
2. 議事
 - (1) 石川県成長戦略「ミライカイギ」設置要綱
 - (2) 座長の選出について
 - (3) 石川県成長戦略の概要について
 - (4) 石川県創造的復興プラン（仮称）の骨子について
3. 意見交換
4. 閉会挨拶
馳石川県知事

(説明資料)

- 資料1：石川県成長戦略「ミライカイギ」設置要綱
資料2：石川県成長戦略の概要
資料3：石川県創造的復興プラン（仮称）骨子
-

1. 開会挨拶

【馳知事】

今日はありがとうございます。なぜミライカイギをスタートさせたのか、ここは最初に私から申し上げたいと思います。私の好きな俳句調で言うと、行政に、魂こめる、ミライカイギ、ということです。私も一昨年知事を拝命して、ビジョンを持つ必要があるなど、成長戦略を作りました。要するに皆さんと協力して、産業とか、医療福祉介護、教育、今回のように危機管理、いろいろな分野で計画を立てて、目標を決めて、それを達成するように、行政として県民の安全安心を守る上で、そのベースに立って、それぞれが思い思いに描いた人生を前向きに歩んでいければいいな、気持ちよく稼いで家族も幸せであればいいな、というような思いで成長戦略を作りました。これは行政としての役割です。それを作るにあたって、県内の各種団体の皆様にもご意見を伺い、県議会議員の皆様や市町の皆様にも声を聞いて、総花的に成長戦略を作りました。こういうのは行政ではよく作って終わりということもあるので、フォローアップが大事だなと、フォローアップをするためにも今石川県内において、それぞれの分野で、男性も女性もやはり仕事だけでなく、社会的使命を持っている方々とディスカッションをして、県が持っている計画はこのままでいいのだろうか、もっとこういう観点があるのではないかという、問題意識を出し合って、共有をして、同時に一人一人に同じ課題であっても、例えば、過疎の問題、少子化の問題、人口減少の問題といってもこれは社会的問題であって、一人一人がそれにどう向き合えばいいのか、アプローチの仕方、こういうのをプロレスではアングルというのです。アングル、角度です。一人一人の置かれている立場というのは見方によって異なって参りますが、その価値観は多様であり、その価値観を認め合うような合意というのが必要であるなど、そういう意味で価値観の違いを皆様とともに、やはり県民としての合意、方向性を見つけ出していくという、そういう役割の会議としてミライカイギを作ろうというふうに思いました。したがって、成長戦略を作るときには石川県を代表するいろいろな団体の代表が中心でしたが、この場合はできれば20代30代40代、これからの時代に責任を持つ、持たざるを得ない、持ちたいと思っている人を、高橋企画振興部長に選んでいただいて、また、加賀、能登、金沢のバランスよく選んでいただいて、男女のバランスもよく選んでいただいて、しゃべりやすい場を作りたい。少し行政的なことを申し上げますと、昨年の9月議会で認めていただいた県の成長戦略は、毎年9月に議会で議論をいただくことにしています。つまり、評価です。加えて、KPI評価という項目も作ってあります。随分背伸びをしたKPIの指標になっています。だけれどもこれの一つ一つ議論をすることで、目標に向かってみんな協力をしましょうという趣旨で、KPIの指標も作りました。なので皆さんお願いいたします。いろいろな意見を出してください。

ここまでは第一弾です。第二弾は元日に発生した能登半島地震により、私どもが目指そうとしている成長戦略というよりも、私たちの生活そのものに大きな変化が生じてしまいました。そうであるならば、昨年度策定した成長戦略に、震災からの復旧・復興、そのビジョン、復興のプラン、どういうふうに折り合いをつけて進めていったら良いだろうか。私たち石川県民の視線は、まずは被災者、被災事業者、被災地に向けられるべきであります。では能登のために、加賀の皆様は何ができるのか、金沢の皆様は何ができるのかという観点や、多様性という観点からも障害者や高齢者、事業者でも店じまいをしなければならぬ人もいるかもしれないかもしれませんが、そういう方々のためにどういうシステムが必要なのかという論点も必要です。したがって、能登半島の震災を踏まえて、改めて私どもが今置かれている立場から先に一歩進んでいくにはどうしたらいいのか、こうした議論もお願いしたいと思っています。

私から紹介しますが、私の事務方の取りまとめを担当いただくのが高橋実枝企画振興部長

であります。高知県出身です。今、財務省から出向していただいて石川県で辣腕を振るっていただいております。皆さんとともに協力してこのミライカイギを進めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

2. 議事

(1) 石川県成長戦略「ミライカイギ」設置要綱

(事務局から会議資料1に基づいて説明)

【高橋企画振興部長】

ただいまの説明につきましてご意見やご質問等はございますでしょうか。

(意見・質問等なし)

ご発言ないようですので先ほどの設置要綱につきましては原案のとおり決定させていただきたいと思っております。

(2) 座長の選出について

【高橋企画振興部長】

座長の選出につきまして、設置要綱の先ほど第5条において座長は知事が指名するものを持って充てることとされておりますので、会議を進めるに当たりまして、この座長を地元の北國新聞社の取締役として、本県の事情に精通されて、幅広い分野の見識を有されている青木委員にお願いしたいと思っております。よろしくお願ひいたします。それでは以降の進行を青木座長にお願いいたします。

【青木座長】

それでは、北國新聞社の広報室長の青木でございます。恐縮ではございますが、ご指名いただきましたので座長を務めさせていただきます。

決して幅広い見識はございませんが、一昨年の9月から昨年の9月まで4回に渡って開かれました、この親会議の成長戦略会議を全て傍聴させていただいたという立場から、皆さんのお役に少しでも立てればとは思っております。それでは円滑な議事進行に皆様方ご協力をよろしくお願いいたします。

(3) 石川県成長戦略の概要について

(4) 石川県創造的復興プラン（仮称）の骨子について

(事務局から、石川県成長戦略PR動画放映、会議資料2～3に基づいて説明)

3. 意見交換

【青木座長】

それでは意見交換に移ります。本日は第1回の会議になりますので、委員の皆様にご自己紹介をいただいてから、事務局から説明のあった石川県成長戦略、それから石川県の創造的復興プランの骨子の内容について、皆様方から忌憚のないご意見をいただきたいと思います。

【數馬委員】

數馬酒造の數馬嘉一郎と申します。今日はオンライン参加ですいません、失礼いたします。意見というほどでもないですが、やはり今1月1日の被災をして、幸福度日本一の資料にある住みやすいの部分が特に社員さんと話をしても一番あるので、まずは生活基盤がしっかり元に戻るといいますか、より良くなることを望んでいます。それから、やはりインフラという意味でも医療であったり、先ほどの資料にもありましたけれども、病院の充実であったりとかというところを望んでいるところがありますので、まずはやはり、日常どおり戻れるような早期の状態の回復を今望んでおります。

【加納委員】

小松ウオールの加納と申します。パーテーションのメーカーで間仕切りですね。一番身近なところだとトイレのブースなんかも作っているメーカーになります。今回こうやって委員に選んでいただいたことは光栄に思っています。

我々の分野で話しますと、メーカーというのは結構工学系の学生が取りづらいというか、大変難しくなっております、働きやすさですとか、住みやすさという話があったと思うんですけれども、石川県で育った方々にも残っていただきたいですし、Uターンもそうですし、あるいは県外とか海外からそういった方々が石川県で働いて、また産業を盛り上げていただいて、また地域に貢献するというようなサイクルができればいいかなと思っています。

それでまた皆さんとご意見をいろいろ交換しながら石川県の成長を一緒に頑張っていければと思っていますのでよろしくをお願いします。

【小杉委員】

NTT西日本北陸支店の小杉と申します。皆様よろしくお願ひいたします。このような委員に選んでいただき本当にありがとうございます。弊社はインフラ事業者といたしまして、元日から能登半島地震の復旧に取り組んでおります。最大約1日950名の体制で全国から支援を受けて、今は大体700名くらいの体制で取り組んでおります。引き続き全力で復旧復興に取り組んでまいります。

今回の能登半島地震は、大阪府がすっぽり入るくらいの面積、人口としては4市5町で17万くらいでしょうか。大きなエリアで約17万、かつ長期的に見たときに人口が減っていく中で、豊かな暮らしを支えるためにデジタル技術は必須になってくると思っています。その集合拠点的なところ、コミュニティ、公民館、病院といった核となる集合拠点としての点をいかに線として結んでいくのか。その線として、自動運転バスなどのデジタル技術をいかに活用していくかと考えています。自動運転は、今後、住民の方々、ボランティアに入っている支援の方々だけではなく、観光客の皆様方にも有効に活用できるものだと思います。デジタル技術でいかに地域を支えていけるかというのが我々の使命だと感じています。公民館などを拠点とする場合も、平時も含めて情報が集積していて情報を得られるといった、平時と災害時の垣根を無くすといえますか、慣れといえますか、そういったものが必要なんだと感じております。能登半島地震からの復興は、間違いなく、今後の日本の地方のモデルになると思っています。元々能登半島は時国家などを初めとし、時代の最先端だったということもあります。地方モデルとしてデジタルも活用し、日本の最先端として、デジタルとアナログを上手く組み合わせたハイブリッドな形で、我々も貢献していければなと思っています。それが能登半島地震に関してとなります。

成長戦略のところなんですけれども、企業の日線でも申し上げると、以前、北陸経済連合会

等のデータの中でも北陸は女性の就業率は高いけれども、管理者の比率が低く、若い女性が都市部へ流出してしまうという調査結果が出ていたかと思います。大事なのは、価値観を多様化させていって、いろいろな方々へ選択肢を提供して、働き方を含めて選択できるような社会にしていく、チャンスがあったら活躍できるような土壌にしていくということだと思います。私も弊社の中で、育児をしながら頑張っている女性管理者の方たちに聞いてみたのですけれども、これだけは言ってと言われたのが、病児保育の充実です。病児保育がしっかりしていると、小さい子を育てながら活躍できるチャンスも広がるので、病児保育がさらに充実されると、石川県は子育てしながら活躍できる、働きやすいといったブランド力に繋がっていくんじゃないかと思います。

【新滝委員】

粟津温泉にあります加賀伝統工芸村ゆのくにの森の社長室長しております新滝と申します。山代温泉にある温泉旅館ゆのくに天祥の関連会社になります。また、小松空港の「空の駅こまつ」や、小松駅で「小松土産店（とさんてん）」を運営しております小松市のDMO、こまつ観光物産ネットワークの代表をしております。

コロナ禍を経て今からという時、能登半島の大震災を受け、石川県の大切な観光地であります能登半島の状況に、言葉にならない喪失感を受けました。すぐに被災地以外の地域は能登のためにできる事を考え、被災していない地域で石川県の観光を続けることで、復興後の能登の観光を後押ししたいと思いました。時間はかかるかもしれませんが続けていきたいと思っています。コロナ禍前後の話にもどりますが、コロナ禍で観光業においての働く意識が変化したと思う部分があります。お客様に来ていただき楽しんでもらうというのが一番の目標だったのですが、コロナ後で働く人が一番幸せを感じていないと、「住んでよし訪れてよし」の理念がないと、観光業を生業としての持続が難しいと感じました。今回の「幸福度日本一に向けた石川の未来」のスローガンはとても賛同できます。石川県で働く方々が、働くだけでなく、家事を営んだり、子育てをされたり、そういった方みんなが幸せになるというか、幸せを感じることに向けて何か考えていければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

【新保委員】

こういった貴重な機会をいただきましてありがとうございます。金沢市にあります泉の台幼稚園という認定こども園で施設長をさせていただいております新保雄希と申します。よろしくお願ひいたします。当法人は金沢と内灘で3拠点で保育事業を運営しているんですけども、この成長戦略で言えば、出生率のところが一番身近な話題かなと思っています。そもそも保育業界は既に少子化で非常に危機感を感じているところなので、これに対して何か次を考えなければいけないシチュエーションなんですけれども、皆さんご承知のとおり、昨年度からこども家庭庁が発足しまして、こどもがまんなかの社会の実現を目指すということで、子どもにスポットを当てていこうという機運が高まっています。今回の資料を見させていただいて、こういった子どもたちの環境、またその子どもを産み育てる子育ての支援の充実というところも触れていただいていることは非常にありがたいことだなと感じると同時に、その上で、この後、もし機会があるなら、ぜひ未来を担う子どもたちの生の声を聞ける、全国の中では、こども会議とかそういった名称で子どもたちが直接主要な地域のトップリーダーとか、または地域の課題について話し合う、プロジェクト型であったり、探究型であったりそういった自分を表現する場所も見直されているというところもあり、我々の幼児教育の世界でもこういったことがすでに始められている部分がありますので、こどもの意見尊重のプロセスが活性化している石川県というのも望ましいところなのかなと思いました。

もう一つは震災復興の方なんですけれども、私も団体の役職を通じて、能登の保育施設の支援の活動を本当に微力ながらさせていただいています。非常に厳しい状況があって、同業として本当に胸の痛い思いを震災直後からしているんですけれども、やはり先が見えない、元々の過疎、少子化というところにあわせてこの震災以降、本当に保育施設の周りに人が、子どもが戻ってくるのかというところで、非常に先行きを案じていらっしゃる、本当に志の高い保育関係者が多いので、ぜひその方々が安心できるような未来に繋がりたいと思います。その上で、たくさん能登の魅力を高める施策がここに盛り込まれていたもので、ぜひそういったところに子どもとか保育、幼児教育というところが繋がっていけるとより充実した内容になっていくのかなというふうに感じました。今後ぜひこういう学びの機会を一つの糸口として能登の子どもたちの未来のことについてより深く考えたいと思います。

【高田委員】

金沢彩の庭ホテル、金沢アドベンチャーズの高田と申します。このような機会をありがとうございます。本日は限られた時間ですので、3つだけ少し意見をさせていただきたいと思っています。

まず一つ目ですけれども、この資料の中で高付加価値化というのが、何回も出てきています。高付加価値化というと日頃からいろいろな議論がされていますが、やはり値段の高い商品を扱うだけが高付加価値化ではないというところをまず大前提にお話させていただければと思います。、ここで参考資料に持ってきたのが、観光庁のアクションプランというものです。ここに記載してあるのが、本当に分かりやすく言うと、売り、宿、人、コネ、この4つが合わさって初めて高付加価値化になるということです。人とコネというところはどちらかというところでも間に合うところで、勿論一生懸命やらないといけないところではありますが、後天的なところが強いと解釈しています。宿のところに関しては和倉温泉に力を入れますということがこの資料で拝見させていただいていますので、一番大事なのは、売りの部分です。ここをどうやって作っていくかというときに私も何度も能登に行かせていただいたり、全国の観光地にもいろいろ行かせていただき、やはり単純に人を楽しませようとしているところであったり、工房に行っても、工房の作家さんとただお話することだけが高付加価値化ではなく、観光目線でそこで楽しめる、それで楽しんだ暁にちゃんとお金を落としてくれるというシステムが整っているところが高付加価値化に成功していると考えます。今から新しくつくる所にはそういった目線も是非入れていただきたいなと思います。

もう一つがそういった観光施設を作る際にどこに最終的にお金が落ちるのかというところも一つ私は懸念しております、単純に今いろいろな県外の資本、大きな資本がおそらく今後入ってくると予想されます。もちろんそれが悪いことではなく、そういった企業がないと、やはり魅力的な施設というのはできませんし、集客力というのもやはり桁外れて強いのも事実です。ですが、やはり地元の方のお財布にしっかりとお金が落ちるようなシステム、地元の方の経済力が上がるようなそういった施設ができればいいなと考えています。

最後が一番のまとめですけれども、私事ですが昨日、テレビ東京さんのWBSというビジネスサテライトの番組で取材していただきました。その内容がハイディワイナリーという能登のワイナリーに行って、現地の方といろいろな意見交換をするというものでした。番組の最後にワイナリーの方に、「能登はあきらめていませんよ」「観光をあきらめていませんよ」というふうに言っていただき、放映が終わりました。それが一番印象的でした。どうしても皆さん県外の方におかれましては、少しずつ能登の震災がどうなっているのかという報道も少なくなっていますし、今後能登がどうなっていくのかなと心配されている方も多くいらっしゃるかと思います。そういった方々に向けて、そこに住む人々が「絶対に諦めませんよ」

というこの気持ちを全国に示すこと、ファイティングポーズを取っているということを知ってもらおうことが、やはりまず一番大事なのかなと考えます。ですので、その発信の部分をお手伝いしてさしあげることが今後とても大事になるのではないかと思います。

【多田委員】

能登町の春蘭の里からまいりました多田と申します。今回このような機会をいただきありがとうございます。私たち春蘭の里は、奥能登2市2町でだいたい50軒くらいの農家民宿を運営しています。

私も実際1月1日の日に能登町の方で被災をしました。あの時の揺れは平成19年3月25日の地震や去年の5月の地震とは比にならないぐらいのとても大きな揺れで、私も自宅にいたんですけど、あの時は死を覚悟しました。何とか家から父と一緒に避難したんですけど、あの一瞬の揺れで、家の向かいの山であったり、道路がひび割れていたり、本当に一瞬で私の大好きな景色がこんなにも崩れてしまうのかなと、すごく悲しい気持ちになりました。私たちは今そんなに被害の多くなかった農家民宿をボランティアの方とか業者の方たちに利用していただいています。私達は今10軒ぐらいで受け入れをしているのですが、受け入れをしている家主のほとんどが70歳以上の高齢者なので、本当に今たくさんの方を受け入れたい気持ちと、なかなかちょっと負担が大きくなっているところで、少し戸惑っている部分もあります。私たち春蘭の里が将来持続していくためには、将来の担い手をこれから探していかないといけないなとは思っているんですけど、実際春蘭の里の中に私以外の若者というのはほとんどいなくて、今同じく20代の子が2人はいるんですけども、そこから上は50代とか60代に跳ね上がってしまうので、何とか若い人に協力していただけないかなと思っていたんですけど、この地震をきっかけにより一層その思いが強くなりました。

能登の若者が県外に出ていく大きなきっかけとして、進学する先が能登にはないということが大きなきっかけなのかなと思います。私も高校から進学するとき、能登に残るのかそれとも一旦大学で勉強してから能登に戻ってくるのかすごく迷ったのですが、私以外の子はほとんどが大学に出てしまって、そのまま能登に帰らずに県外であったり、金沢の方に残っている子がとても多いので、能登に帰ってくる子が増えるような仕組みを何か作っていただければすごく嬉しいなと思います。

私の周りには本当に高齢者が多くいるんですけど、今回の地震をきっかけに、ちょっと急遽体調が悪くなった人がとても多くいたのですが、私たちの地域は近くの病院まで大体30分ぐらいかかってしまうので、急遽しんどくなった人がいても、救急車を呼ぶのか、それとも自分たちの力で病院まで行くのか、その一瞬で判断しないといけないんですけど、今回は救急車を呼ぶよりも自分たちの力でいった方が早いから、地域の人に協力してもらって連れて行ったというケースが多かったのですが、なので今回の地震をきっかけに医療の発展を望みます。

私たちも何とか能登に残り、能登を守りたいなと思っているので、これから地震のせいでも人が少なくなるのではなくて、能登にたくさんの方が来てくれたり、能登の人が残るような未来になってくれれば嬉しいなと思います。

【出島委員】

珠洲市総合病院の出島彰宏と申します。はじめに、この度の能登半島地震におきまして、石川県をはじめとする全国の皆様、また各医療機関とDMATを含めた支援団体の方に数多くご支援をいただきました。本当にまず感謝申し上げたいと思います。ありがとうございます。引き続き、依然として震災からの復旧復興は道半ばでありますので、どうか今後も引き

続きのご支援を承りたいと存じます。どうぞよろしく願いいたします。

私は自治医科大学を卒業しまして、金沢で5年、その後輪島で1年と珠洲で6年、地域医療に従事してまいりました。珠洲は非常に暖かい地域の魅力がありまして、その魅力を感じて、珠洲に家族5人で定住して今日に至っております。

震災後、私が勤務する珠洲市総合病院では、遠方に避難された高齢の方が多くいらっしゃいましたが、やはりかかりつけで馴染みのある医療スタッフに診察を受けたいということで、加賀市であったり遠方からはるばる珠洲まで受診に来られる方が多くいらっしゃいます。診察を終えるとやっぱり安心しましたと言われて、次も必ず珠洲に戻ってきますと言って予約を取ってお帰りになる方が多くいらっしゃいます。やはり震災を通じて高齢者が多い能登北部の人たちが安心して生活するためには、病院は欠かせないものであるということを強く認識しております。

現在の課題としては、やはり珠洲市は、まだ断水をはじめとした生活環境の改善が不十分ですので、買い物や、子どもの送り迎えや入浴洗濯など不自由があります。当院の職員というのは、ほとんど働くお母さんが多い状態ですので、現状の患者数が減った中においては、子育てと病院の勤務というのは両立できておりますが、今後、避難先の住民が帰ってこられた際に、患者数が増えると、残業が発生した際に、子育てと仕事を両立できるのかという点に非常に多く不安を残しております。離職せずに残ったスタッフが働きやすい環境を作ることが急務であるという風に考えております。

また、その後の生活についても少しお話したいんですが、珠洲市のほぼ全ての小学校のグラウンドは仮設住宅に変わっておりまして、子どもたちはグラウンドで遊ぶなり運動することができておりません。また、小児科医は、今珠洲市は確保できておりますけれども、今後もし将来を考えた時に、少子化で小児科が撤退するようなことがあってしまうと、夜間に病院にかかりたいという場合に七尾まで1時間半かけて通院しなければならなくなると、やはり子育て世代が住み続けるということはできなくなると思います。小児産科医療体制の維持、そして子どもが住みやすい環境作りというのはぜひお願いさせていただきたいなと思っております。

病院の経営面においてもかなり患者数が減って、今大幅な減収を見込んでおりまして、病院の維持が必須ということを考えますと、ぜひ県や国からの財政的なご支援を何とかお願いできないかという風に考えております。

病院の経営面であったり医師の確保という点で、一つ、統合病院、その機能集約というのは一つ選択肢かと思われれます。ただ今、震災で交通インフラがかなり破綻してしまっておりますので、その交通アクセスをどう確保していくのか。巡回バスであったり、タクシーであったり、自動運転というお話いただきましたが、そういうことも必要になってくると思いますし、あとはそもそも半島はやはり面積が広いですので、珠洲市の最も先端の地区から、例えば能登空港の近くに統合病院がもし建設されるとしても車で1時間半かかります。週に3回受診が必要な血液透析の患者さんであったり、寝たきりで訪問診療が必要な方や施設入所の方というのは、やっぱりそれだけ遠いと受診は難しいと思いますし、今までの2市2町の病院に医療機能を残すということになりますと、かなりたくさんの方の医療スタッフが必要になってきます。人が減っている中で確保できるのかという点と、各地に点在した医療スタッフが果たして統合病院まで通勤ができるのかといった点や、多くの課題があるのかなという風に思います。

震災でまた人口が流動的であったり、各2市2町の医療ニーズも異なってきていると思いますので、ぜひ人口動態を注視していただいたり、各市町のその病院のニーズを聞き取っていただいて、医療計画をまた策定させていただきたいという風に思います。課題は山積しております。

すが、私自身も能登北部地区に住む医師の1人として、また珠洲市の住民として、温もりのある社会づくりに貢献できるよう発言できればと思います。今後ともよろしく願いいたします。

【任田委員】

任田和真と申します。こういった場で意見させていただくのは初めてなので大変緊張してはるんですけども、なんかちょっとキャンプのような雰囲気を作っていただいて、真ん中に火があったらキャンプファイヤーのような感じが、ちょっとアットホームな雰囲気を作っていただきありがとうございます。

私普段は羽咋市の千里浜レストハウスを経営しております、能登風土という会社に勤めております。マネージャーをしております。また、地域おこし協力隊という仕事を2018年からしております、それを卒業し、現在は地域おこし協力隊のOB、OGをまとめたネットワークを組織しまして共同代表を務めております。そういうことで、私普段は、こういった戦略を立てる側というよりは、いただいた戦略、自治体から降りてきた戦略、会社の戦略を形にするというところが私の専門かな、という風に思っておりますので、今日はあえてこの戦略に対して意見を言うというよりは、この戦略を形だけの戦略にしないためにどうしたらいいかなというところをちょっと意見としてお伝えさせていただければと思います。

そういったところでまずお話しすると、一つポイントとしては、この石川の県民の方々が行っている、戦略がない取組であったりとか、戦略なき実行みたいなのところをいかに石川県の戦略として取り込むか、みたいなのところがポイントなのかなという風に思っております。

今回、このミライカイギの中で、成長戦略というのを恥ずかしながら初めて拝見したんですけれども、きっと県民の中で取り組みをされてる方で、この成長戦略の内容を知っていて取り組んでる方はきっと少ないとは思うんですね。ですが、きっと皆さんが行っている取組というのは、この成長戦略のどこかの中にはヒットする取組を必ずしているはずで、県としてはそれをまず見つけて、繋がって、サポートするという姿勢が大事なのかなという風に思います。

具体的に言うと、私昨年度、能登の地域で移住者交流会、イジユトークというものを月1回開催しておりました。やはり移住してくる方というのは、全く縁のない地域から来ていますから孤立しがちです。そういった方々が、同じ境遇を持った移住者同士が集まって、単なる飲み会をするわけなんですけれども、月に1回安心して飲みながらコミュニケーションを取れる場というのを運営しておりました。その時に、当時の移住担当の上田さんという方がその情報を聞きつけて、任田さん行かせてくださいという声をいただいて、来ていただきました。最初のトークセッションの時になぜか一番前に座って、どの参加者よりも楽しく参加してくれて、会が終わった後に、こういう取組は最高だからぜひ応援させてくださいということを、県の職員の立場の方から声をかけていただいたんですね。その時にすごい嬉しくて、自分の楽しみでしかやっていなかったものに対して、県の職員の方が、こういった取組を石川県としてぜひやりたいというふうに声をかけてくれたことによって、社会的な意義というか、そういうのを感じてすごいやりがいを感じました。その後、上田さんは毎回必ず行きますということで、本当に毎回必ずイジユトークに参加してくれて、その度に声をかけてくれて、すごく嬉しい思いを個人的に感じました。その後も、必ず県の広報に情報として発信していただいたりとか、予算的な措置というわけではなくて、その中でできることをサポートしていただいていたので、そういった意味で本当に助かったなという風な記憶があります。

そういった取組を、本当に県内、県民の方、いろいろな取組されていると思いますので、

県のその部署のメンバーでアンテナを張って、県の活躍されている方に繋がって、そこで何をしているか聞き取りながら、それを支援していくという形が、各部署、各ジャンルで起こってくれば、石川県ってすごい盛り上がるなというのは体感的にあるので、そういった意味で、何かこう県庁を飛び出す職員というか、いろんな地域に飛び出て、面白そうなことを嗅ぎつけて、それに参加していくみたいな動きがもしあると、我々戦略の末端というか、それを実行してる部隊からすると、ものすごい力になるという風に思っているのです。そういった取組があれば非常に嬉しいなと個人的に思っているところです。

震災に関しては一つだけ、私七尾に住んでいるので、あの震災を体験したんですけれども、そういった負の体験をいかにしてプラスの体験に自分の中で落とし込めるかというところがポイントかなという風に思っています。個人的には、震災があって断水になったときに、お風呂に入れなかったんですけれども、その時に、近所の人のお風呂を借りて、入りに行ったりとか、そういったところというのは被災の時しかなかなか経験できないところで、地域のコミュニティの中で子どもを育てるということであったりとか、そういうことを初めて経験しました。それは普段はできないことであるし、すごいそれも価値があるなという風に思ったので、この震災の取組の中で、いろいろな皆さんの課題がある中で、このプラスの体験というのを少しずつ発信していくことができればいいのではないかなという風に個人的には思っております。

【中惣委員】

小松市から参りました中惣恭子と申します。この度、ミライカイギ委員を拝命し、錚々たる方々とお席を共にしまして大変緊張しております。皆様どうぞよろしくお願い致します。私はいけばな小原流南加賀支部長、また小松市教育委員をさせていただきます。小原流は、池坊、草月流と並び、華道の三大流派の1つでございます。小原流南加賀支部のお話を少しさせていただきますと、昨年、創立60周年を迎えました。それを記念いたしまして、昨年4月に、勸進帳の舞台である安宅の関、安宅住吉神社と、料亭長沖で記念花展を開催致しました。長い歴史をもつ安宅の関での花展は初めての試みでしたが、2日間で約3,400名の方々にご来場いただきました。これからも粋にとらわれず、伝統文化いけばなの可能性を広げて参りたいと思っております。

能登の復旧復興という面では、私が運営する花教室を事務局とし、2月に能登を応援するプロジェクトを立ち上げました。1人1人のエールが大きな力となり、能登にたくさんの笑顔の花が咲くよう願いを込めて「エールガーデンプロジェクト」と名付け、4月13日に小松市松雲堂にて、食と芸術をテーマに第1回目のチャリティイベントを開催致しました。このエールガーデンプロジェクトの根幹には、いろいろな世代の方たちが同じ空間で、能登への支援を身近なものとして感じていただきたいという願いがございます。1回目では、小松市立高校芸術コース美術専攻生に、お客様の似顔絵を色紙に描いていただき、1枚500円で販売致しました。いけばな体験では、親子で体験される方が多く、「とても良い思い出になりました」とお喜びの声をたくさん頂戴しました。また、小松市の名だたる飲食店に能登の食材を使った新メニューを開発していただいたり、九谷焼作家の先生方をはじめ、たくさんの方々に協賛していただき、その日の収益から160,950円を寄付させていただきました。

2回目の開催は9月21日、22日を予定しております。開催に向けて、珠洲の農家さんとお話をさせていただきます。能登での農業を再開させるための貴重なお話をお聞きするなかで、「建物は倒壊して大変な状況だが、土は元気なんだ。農業を再開して復興のシンボルにしたい。」というお言葉がとても印象的でした。微力ではありますが、今後は能登の農家さんの応援もさせていただきますと思っております。

これから皆様と意見交換を重ねて、石川の未来を担う子どもたちや若い世代の方たちに、故郷石川に誇りと愛着を持っていただけるよう、精一杯務めさせていただきたいと思っております。

【橋本委員】

北陸電力石川支店の橋本と申します。この度は大変貴重な機会をいただきまして、誠にありがとうございます。大役を仰せつかり、身の引き締まる思いではありますが、少しでもお役に立てるような、そういったお話ができるように努めたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

まず、多田さんのお話を聞いて涙が出そうになったのですけれども、この度の能登半島地震で被災された方々に対しまして、心からお見舞い申し上げますとともに、平穏な生活が1日でも早く訪れますことを、心からお祈りしております。そして、私達北陸電力グループといたしましても、地域の皆様に支えられながら、これまで事業運営してきたということを今一度胸に刻みまして、能登の復興に向けて、グループの総力を結集して一丸となって取り組んでまいりたいと考えております。

この会議も本来であれば1月開催でありましたが、未曾有の事態となり、この会議で意見交換しなければならないという内容の石川県成長戦略に創造的復興プランが加わり、この会議の重みも一層増したのではないかと考えております。

ここで、現在私が携わっている仕事について少し紹介させていただきますと、地域のお客様に対しまして、カーボンニュートラルやBCP対策に繋がる様々なサービスのご提案をさせていただいております。具体的には、太陽光や省エネ設備の設置、所有、維持管理をトータルサポートするサービスや、走る蓄電池と言われている電気自動車を活用したBCP対策のご提案、また、現在お使いの電気に環境価値を付与したメニューのご提供なども行わせていただいております。このように、業務経験を活かし、カーボンニュートラルの下に、能登半島地震を踏まえた地域のBCP対策、強化など、持続可能な社会の実現に向けて少しでも実効性のある提案ができればと考えております。よろしくお願いいたします。

一つご意見といいますか、今成長戦略における横断的戦略のカーボンニュートラルについて意見を言わせていただくという立場で、お話しさせていただくと、再生可能エネルギーによる発電電力量がKPIで設定されておりますが、太陽光などの導入に関して申し上げますと、建物の屋根に設置する場合と、農地や遊休地といった地面に設置する、野立てというのですが、そういった場合で設置する期間が全然違ってきます。何が違うのかと言いますと、屋根とか、野立てどちらもそうなんです、当社グループの電力網への接続検討にまず期間が必要となります。さらに、野立ての場合、地面に置く場合は、それに加えて地盤調査や近隣住民のご理解を得るための説明などが必要となってきます。このように、各々の場合に対して、発電開始に至るまでの期間は違いますので、そういったことを考慮した、具体的に導入するスケジュールを考えていただければと思います。より効果的で実効性を高めることができるのではないかと思います。トータルでこれだけ再生可能エネルギーを導入したいということが書かれていたのですが、そのような各々の特色がありますので、そういったスケジュールを考慮していただければと思います。

【森高委員】

加賀建設の森高です。よろしくお願い致します。私は、現在、土木工事の現場監督をしています。実際、能登の地震には行っていませんが、弊社として、道路復旧であったり、救援物資などの運搬に携わっています。

また、石川県の建設業の女性部会会長をしています。先日、幹事会があり、地震について女性部会として何か活動ができないかという議論がある中で、やはり子育てをしている皆さんは、ボランティアに参加したい気持ちはあるが、能登まで行くと自分の生活や子育てなどができなくなるというジレンマを抱えており、行きたい気持ちあるけど行けないという状態でした。

私自身は、2人子供がいるのですが、2人目が高校2年生で、子育てが少し一段落した状態です。実際、小杉さんがおっしゃったみたいに、病児保育が本当に欲しいという時期があったのですが、それも近くに祖母とか祖父がいて、預けることができましたから私はこの仕事を続けることができました。実際、今、核家族とか若い子で県外から就職した子などから悩みを聞いていますと、やはり結婚や出産、育児に関してちょっと不安を持っている。それを経験しながらどうやってスキルアップしていくのか、仕事を継続させていけるのかということで、みんな悩んでいるという状態です。

私は仕事に時間を割きながら働いていた状態なので、あんまり参考にならないんですが、今後、長く働くために、実際離職者も多く、継続して働く若い人が少なく、建設業界全体が高齢化社会で、働いてる人もみんな50代、60代の方が多く、若い人に続けてもらうために環境を整備していかなければならないと思っています。週休2日の制度等は取り入れているのですが、根本的にどうしたら働きやすいのか。ハード面は整備されてきてはいると思いますが、ソフト面でも何か改善できないかとは思っています。

【安井委員】

白山市で農業をしています、農業法人安井ファームの安井といいます。

白山市では、お米とブロッコリーを作っているのですけれど、今現状、この農業業界として、いろいろな問題があって、私的に今一番問題なのは、やはりこの高齢化がどんどん進んでいまして、だんだん農業を辞めていかれる方が多いということが、石川だけではなくて、日本全体の問題があるのかなと思っています。大体今、平均年齢が68歳となっていまして、石川県においては70歳になっている。どんどん辞めていって、石川も農業放棄地がかなり多い状態になっています。5、6年前に私の方でも、少しでもこの農業放棄地を解消できないかということで、志賀町だったり、穴水だったりに行って、農業参入をして、実際に作りに行ったこともあったんですけども、やはりかなり能登は道路のインフラであったりとか、雇用の問題であったり、本当に問題で、なかなか前に出なくてちょっと撤退してきた部分もあって、そんな中、今年の1月に地震があって、やはり能登の方にはかなり甚大な、農業においても、産業においても甚大な被害が。私の知り合いも能登に多くいますけれど、現状、この高齢化も含めて農地の維持、畑や田んぼもかなり液状化して、隆起したところもあってできていないということです。正直水田なんかは、1年に一遍しか採れないんですよね。要は5月に田植えをして10月収穫と。要は1年に一度しか収入がない産業なんです。そんな中で田植えができないとなると、もう1年収入がないのです。液状化という部分で、実はうちも河北にはほ場があり、液状化した畑が何枚かあります。液状化は自然に直るかという直らないそうで、人工的にいかりを入れるか、土を盛るかという形でないと、直らない。そうなった中で、能登の方でかなり被害がある。2000ヘクタールぐらい、結構被害があるとお聞きしています。そんな中でやはり時間をかけて、当然1ヶ月2ヶ月で直るものではないと思うので、何年かかけて計画を立ててやっていくとなると、農業者的にはもうその間どうやって生活していけば良いのかなというのがあって、当然、被災して金沢や他の地域に移られる方もいれば、また農業を離農して違う仕事をされる方もいらっしゃるのかなど。そうやってきたときに、やはり非常に石川県ブランド化されている農産物たくさんあるんで

すよね。本当に県の方が優秀な方が多くて、ルビーロマンであったりとか、お米のひやくまん穀であったりとか、ブランド化された農産物があるのですけれど、肝心の農業者がそこにいなくなるとは、いくら数年後、農地を直したとしても、農業後継者がいなくなったら、大元がなくなってしまうというところで、やはりその辺のケアであったりとか、農業者に対する支援であったり、そういった部分が正直早急に必要になってくるのではないかなと私は考えます。自分たちも何かできることがないかなという部分で作業の手伝いに行けたりもしたらいいのかなと思っているのですが。肝心の畑があったりなかったりという部分もあり、まずは早急に国の予算になるのか県の予算になるのかわからないんですが、しっかりと整理していただいて、少しでも早く農業ができる形にして欲しいなというのが、今日はちょっとそういうところをお伝えしたいなと思います。

【青木座長】

今ほど委員の皆様から貴重な意見をいただきました。日常がまだまだ遠いという能登の皆さんの声を聞きましたし、医療現場、被災地の実態に応じた医療計画作りや見直し、これもいただきました。それから病児保育の強化など、子育て力を高める石川県のブランディング戦略の必要性もお聞きしましたし、値段だけじゃないという高付加価値化の環境づくり、いろいろな意見をいただきました。今ほど、安井委員からは平均年齢が70歳、農業従事者の高齢化が進んでいて、あらゆる分野で若者の地元定着、それから若い労働力が必要だという声をいただきました。

実は今回、馳知事がこのミライカイギの設立を発表された後、実は私のところにいろいろな意見がありました。大体はこのミライカイギに対する要望といいますか、意見が中心でしたけれども、いろいろな皆さん分野でメンバーを揃えましたけれども、やはりこの中にいない、親会議にはいたけれどもこの中にいない。例えば、中小零細企業の代表者、そういった方が親会議にはいたのに今回の会議にはいない。中小零細企業も地震ですごく厳しいので、何かそういうところも拾ってほしいなという声を届けてくれた人もいました。スポーツの分野、プロスポーツの分野で被災地を元気づけるのは、スポーツにできる唯一の貢献だと思うけれども、実際スポーツをしようにも、練習場がない。それからホームに使っている施設が避難所になっていて使えない。つまり入場料収入がないので自分たちのチームの運営そのものが立ち行かないので、被災地の皆さんを応援したくてもなかなか応援ができない。いろいろな声をいただきました。

そういった声を一つ一つ拾っていくのはなかなか難しいですし、これだけのメンバーを揃えるだけでも大変でしたので、ここからさらにフィールドを広げていくというのなかなか難しいと思いますけれども、せっかくこういったメンバー揃っているところでございますので、皆さんからいただいた意見、県の成長戦略という大方針はもう決まっておりますので、それをいかに実効性を持たせていくかという点で皆さん方の意見を一つ一つ反映をさせて、今度の石川県が5月中に取りまとめられる予定の石川県創造的プランの最終案に活かしていただきたいと思っております。

【馳知事】

そういうまとめた意見を期待しているのではないんです。そうではなくて、青木さんは政治部長をされておりましたよね。大変申し訳ないけど、報道規制線の向こうにおられる報道のいわゆる代表という意味で私達行政や政治に対して中立的な立場で文句を言ってほしいんです。批判も言ってほしいです。そういう厳しい意見をもらえると選んだんです。

改めて、やはり私ども良かれと思って、法律と条例や制度に基づいて、財政の配分という

ことは一つの行政の仕事なのですけれども、いや、石川県の特性を踏まえるとそれはもっとこうの方がいいのではないかとといった提案であるとか、そういった普段から拾い集めている声をやはり青木さんには代表として言っていただきたいと思います。なので、今おっしゃったようにスポーツであったり、中小企業の方々であったり、また、まさしく障害のある方とかそういう施設で働いている方々とか、なかなか拾い上げづらいような声も、ぜひお願いをしたいと思います。そういった意味で、皆でビルドアップしていきたいと思っておりますので、改めて青木さんからお願いします。

【青木座長】

今知事からご宿題をいただきましたとおり、我々石川県内全域に報道のネットワークというのがあって、いろいろなところで幅広い声を拾えると思っております。ただ今、批判的な意見をということでしたけれども、そこは中立的に見て、またこれから日々の報道の中で感じたことがあれば、また馳知事にここでご意見としてお伝えしたいなと思っております。

【馳知事】

数馬さん何かご意見をお願いします。

【数馬委員】

ありがとうございます。皆様のご意見を伺いごもっともなことばかりだと思っておりました。最初にお伝えした意見に付随して少し業界ならではの自社目線で言うと、戦略の中でも地酒という食の文化ということで、地酒という我々の生業である日本酒の醸造技術のところなどにも触れていただいたので、やはり我々としても日本酒は、鼻負目かもしれませんけれども、石川県の魅力の一つだと思いますし、いろいろな産業をお繋ぎできるようなコンテンツかとも思っております。やはり復興にはかなり時間がかかっていますし、資源は農産業であるお米を使ったり、お水を使っているのですけれども、今使っているお水が出なくなった酒蔵さんなどもあったりするので、この場所で皆さん立ち上がりたいと思いつつも、なかなかやりにくいという状況があったりするのでそういったところのご支援を業界としてもいただければありがたいなというふうに思っています。

あと、人口の流出についていうと、比較的弊社は若手の方の採用に取り組んでいるのですけれども、やはりその地元、能登から少し違う地域に行くという選択肢をされるという機会というのが、やはり結婚されて、お子さんを持たれたフェーズで起こりやすいなということが感じれまして、それは今ほど皆様のご意見にもありました医療の問題であったり、あとはどうしても同級生が少なくなったりとか、スポーツをやらせているけどなかなか試合に出られる人数が揃わないとかいろいろな事情もあるので、そういった面も方針案があれば嬉しいなと思っております。

4. 閉会挨拶

【馳知事】

本当にどうもありがとうございました。私まず成長戦略を作るときは総体的に総花的にというふうに思いました、行政の立場としてあそこに肩入れ、ここに肩入れというわけではなくてです。県民生活にとってまず本当にベースである危機管理を軸にしながら、産業界も医療福祉関係も教育も含めて、総体的に。同時にそれをデジタル化とグリーン化というのは時

代の趨勢として、絶対に必要だと思い、こういうふうに取り組んできました。それで出来上がりました。これをいかに実行していくかということは、県民の皆様にお伝えをしていかなければならない。そうなってくるとやはり、私いつも3つのことをすごく意識して仕事をしているのです。パッションというのはやはり必要です。情熱、絶対にやっているんだという意欲的なパッション。それからミッション。使命感を持って、なぜこの仕事に取り組まなければいけないのか、自分が石川県に生活している意味は何なのか、なぜ学ぶのか、なぜ働くのか、自分に与えられたミッションというものを自覚しながら。同時に3つ目が私一番大事にしている、コラボレーションです。1人ではできないじゃないですか。みんなが持ち寄った力を、それによってかける2、かける3というかけ算にもっていくことができると思っています。たし算だけでも大変なんですけども、やはりこれは、たまたま今日はこのチームですけれども、それぞれ皆さんの組織において、いろいろな関係、協力会社もあると思いますし、団体もありますが、みんなが知恵を持ち寄って、ミッションを持ってパッションを持って、コラボをしながら方向性を持っていく。我々行政の場合には毎年のやはり評価です。議会の評価であったり、またそれを今度、予算として次の年度にどう繋げていくかということにもなっていますので、とどまることをしてはいけないと、こういうふうに思っています。なので、少子化や高齢化というのは避けては通れないのだけれども、そこばかり着目するのではなく、そうだとすればどうしたらみんなが満足できるような稼ぎを得て、ここに住んでいて良かったなと思えるかという、そこをやはり打ち出していく。私はそのためにやはり文化という、文化活動は絶対に無くしてはならないし、アートであったり、スポーツであったり、音楽であったり、伝統芸能であったり、やはりそういったもので感情を揺さぶるような文化的な活動というのは絶対に無くしてはいけない。それはある意味では、能登においては日本遺産となっているお祭りであったり、あえのことであったりするわけであります。そういったことをやはりこの会議を通じて、みんなを持ち寄って意識を高めていき、当然それを発信していく、そして批判も受けながら、さらにアップデートしていくというような、こういう回転を上手くしていきたいなと私は思っています。改めて次の会議について、また高橋さんからご報告あると思いますが、どんどん議会の皆様にもお伝えし、県内19の首長の皆様や産業界の皆様、団体の皆様にお伝えをしながら、やはり参加意識を持っていただけるようにやっていきたいなとそういうふうに思っておりますのでどうぞよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

5. 閉会

【高橋企画振興部長】

以上をもちまして第1回石川県成長戦略ミライカイギを終了させていただきます。

第2回の会議につきましては改めてご案内をさせていただきます。よろしくお願ひいたします。復興プランを5月には一度とりまとめ、6月の議会もございますので、6月議会が終わってから、それ以降で皆様と日程調整をさせていただいた上でと考えております。

本日はお忙しい中ご出席を賜りまして本当にありがとうございました。

欠席された委員からの意見

【茶道裏千家今日庵業躰 奈良 宗久 委員】

この度このような地元石川の将来を見据えた会議の委員にご推挙いただき深く感謝申し上げます。私は裏千家今日庵業躰という立場で京都の裏千家今日庵の御家元宗家に仕え、時には名代として、国内外に茶道を指導させていただいております。また学生の頃から実家が窯元でありますので美術工芸作家としての側面も持っております。

冊子の文中に10年先を見据えた石川県。幸福度を上げていく。といった項目が見受けられました。その中には高齢化に伴う人口減少という大きな問題がございます。デジタルとは言い難い、アナログに近い文化をどのように担っていくか。石川県としては茶の湯や能楽、工芸と言った文化を色濃く残しており、石川の伝統文化や文化を大切にといった言葉を多く見受けられます。しかしながら、それを体験、稽古する方々の間口がなかなか狭いように思われます。

また、教授者、体験者もこの先、減少傾向にあると思われまます。石川県としても、例えば、芸妓衆に対しても行われている補助のようなかたちで、茶の湯に限らずそれら伝統文化を担う人、教授者、作家など、場所の確保、例えば茶道会館のような公的な建造物や何かの会を催すにあたっての費用など、支援のような策が今後必要になると思われまます。そうでなければ、ますます担い手が減少していくかと思われまます。観光など客側だけの誘致の目線だけでなく、石川県民の文化の担い手を育てていく環境づくりも今後重要になってくると思われまます。そこからの今後どのように若年層、そして県外の方々に言葉ではなく、内容を発信、理解していただくか。広く石川県に行って良かったと思っただけで深い体験の場が必要になるかと思われまます。

元旦に起きた能登地震においては被災された皆様には心よりお見舞いを申し上げます。全国ニュースなどでは少しずつ報道も少なくなっているように思われまます。一方では茶道では茶道具というものを日常的に使用するのですが全国的に積極的に輪島塗であったり工芸品を使用していこう、チャリティー茶会をし義援金を募ろうなどといった気運が多く見受けられます。あと、穴水在住の私の茶友が本人が被災しているにも関わらず、定期的に仲間と能登の避難所を回り、呈茶を催し少しでも被災された方々は心の安らぎを得られているようです。その活動に京都の裏千家家元も賛同されお菓子や抹茶などの費用を受け持たれておられます。そのような文化を通じての広がりがあります。

このような文化ということは生活の確保ののちの後方支援として今後必要となることでしょう。そこで例えば今回の能登の状況に鑑み、石川の工芸をただ広く見るのではなく、実際に使用してのアートフェスティバル、茶会、總持寺といった禅の思想的な会などを網羅的に盛り込んだ広く巻き込むような催しができないかと思われまます。場所は金沢でとりあえず開催し、義援金を集い、そして今は難しい状況ですが、復興の中期の時期に能登にて開催するなど、アートと茶の湯などを混合した「祈り」的な催しができないかと思われまます。

あくまで文化を伝えていく職種からの全国を見渡して思う今後の一意見でございます。